不倫のカクテル

他人の妻に恋をするというのは普通にあり得る話だと思う。

　現に俺はその状況に十分に陥っている。

　去年、初恋の同級生の秋本が結婚した。相手は俺の親友。仲介人は当然この俺自身だ。

　元々俺は二人と共通の接点を持つ人間で、高校時代はほとんど他人のような関係だったが、俺が二人と一緒に出掛ける時に事故に巻き込まれて、現場に行けなくなり、二人だけにした翌日には何故か仲良くなっており、おまけに親友、三井というのだが、こいつも秋本が好きらしくて、流石に三井と取り合う気になれなかった俺は二人の親友というポジションで満足しようとした。

　秋本を忘れる為に興味も無い女に走った。高校を卒業してからは二人を忘れようと、パチスロやアルコールにも挑戦した。

　何よりも二人を忘れたかった。戦わずに逃げた男が二人に会わない為にあの手この手で逃げているのは滑稽でしかなかった。

　そして、就職後は遊んでいた過去と決別するようにワーホリ気味に働いていた。

「神戸君、大丈夫？」

「大丈夫です」

　退社して家に帰る駅でなんと秋本に見つかってしまった。

　もう秋本ではないのだが、秋本と呼んでしまうのは未練だろうか。

　秋本に〝話がある〟といわれて彼女の行きつけのバーに来ていた。

「そんな他人行儀にしなくても良いのに」

「三井に悪いですので」

　吐き捨てるようにそう言って〝カンパリオレンジ〟を煽る。

「……三井君か」

「なにかあったのか？」

　結婚直後にあった時は普通に幸せそうにしていたのに、今の秋本からそんな雰囲気は感じない。

　頼んだ〝ジンライム〟も少ししか飲んでいない。

「実はね、三井君に他に好きな子がいるかもしれないの」

「三井に⁉」

　信じられなかった。

　三井は非常に情に篤い奴だった。

　その三井が浮気、俄かには信じられない話だった。

　だが、秋本の声色や表情から嘘だとも思えなかった。

「なにか……証拠はあるのか？」

　信じたくなくて、そんな言葉を吐く。

「帰りが遅いのは、理由になる？」

「……仕事だと思うけど、三井の奴、忙しそうだろう」

　逃げたくてワーホリに走った俺とは違い、普通に昇進して重役に就いた三井はきっと普通の仕事で忙しくて帰りが遅いだけじゃないのか。

「頻繁に携帯ばかりを見ているのは？」

「……現代人にはよくあることだと思うけど」

「突然、優しくなることは？」

　その後も〝香水の匂い〟がどうだ。

　〝家を空ける時間が多い〟とか。

　俺の中での三井への疑心が高まってしまう。

　何よりも三井への不信を抱く自分、そして疑心を持つような男に初恋の女を託したことが許せない。

　そして俺の中で育っている〝俺ならこんな風にさせないのに……〟という烏滸がましい感情が気に入らない。

　俺はあの日、二人の幸せを心から願っていたはずだ。

　未練なんてある訳がない。

　あっていい訳が無い。

「あの日、神戸君が間に合えばよかったのに……」

　去り際に彼女が吐いた言葉が、俺に襲い掛かる。

　だとしたら俺はどんな間違いを……。

　こうなったら自棄だ。三井のことなど気にしてられない。

　慌てて秋本を追いかける。

「待って！」

　俺の声に秋本の足が止まる。

　慣れない走りで、息を切らした俺が息を整えている間に秋本が振り返る。

「シェリーでも頼もうか？」

「よ、よろこんで」

　俺と秋本は不倫関係に陥った。ずっと欲しかった〝人妻の〟秋本を手に入れたんだ。三井の浮気には感謝を禁じ得ない。

　その後、秋本は子供を授かった。

　三井は自分の子だと信じているけれど、その子の父親はきっと俺だろう。三井、俺は何代かけてでも俺はお前から奪い続けてやる。